

菅 泰男
御輿員三

両教授退官記念論文集

京都 あぼろん社

菅 泰男
御興員三

兩教授退官記念論文集

定価 九、八〇〇円

一九八〇年一月三日 発行

編集 菅・御興兩教授退官記念論文集刊行会

代表 岡 照 雄

発行者 伊 藤 武 夫

印刷所 正 美 社 印刷所

発行所 株式会社 あ ぼ ろ ん 社

京都市上京区河原町通今出川上ル青竜町二〇九
電話(〇七五)三二七七一七／振替口座・京都八四五九

©一九八〇 菅・御興兩教授退官記念論文集刊行会

落丁・乱丁はお取替えます。

まえがき

京都大学文学部では、昭和五四年四月に菅泰男教授が、続いて五五年四月には御興員三教授がそれぞれ停年退官された。菅教授は昭和二八年から、御興教授は昭和二六年から御退官の日に至るまで英米文学・語学の研究と教育にあたられ、大きな業績を残されたのである。

その間に教室で直接にお教えを受けた私共卒業生は、両先生の御功績を記念し御指導に感謝するために英米文学・語学論文集を刊行することにした。多くの思い出、深い感謝と共にこの論文集を両教授に献呈申し上げる。

昭和五五年一月三日

菅興
両教授退官記念論文集刊行会

目次

まえがき

菅・御輿両教授退官記念論文集刊行会

vii

狂気の詩魂

佐野 哲郎……………一

——スウィヴェ伝説とフラン・オプライエン——

バラッド頌

櫻井正一郎……………二五

——「アッシャー井の女」をめぐって——

スペンサーにおける「時」の観念

田中 晋……………三〇

シドニーの取消しの詩

大塚 定徳……………三三

アストロフィルの苦いユーモア

平川 泰司……………三七

『スペインの悲劇』の構造と意味

喜志 哲雄……………七一

『エドワード二世』管見

岡田 洋一……………八三

シャイロック

尾崎 寄春……………九五

——シエイクスピアのヴィラン——

ブルータスの悲劇

依田 義丸……………一〇七

ヴァイオラの変装の意義について

丸橋 良雄……………一三〇

『ハムレット』に於ける「見せかけと真実」の主題

田沢 恵子……………一三三

——劇中劇まで——

ハムレットの「狂気の装い」と「二重の時間」について……………武並 義和……………一〇四

ヒューモアの悲劇としての『リア王』……………山内 良樹……………一〇五

——副題より示唆される内容について——

ローマの崇高なしきたりにならつて……………吉富 栄……………一〇七

——『アントニーとクレオパトラ』のダブル・クライマックスをめぐる一考察——

シェイクスピアの「嵐」にいたる道……………山岸 政行……………一〇八

プロスペローの役割の重層性……………蒲池 美鶴……………一一九

ベン・ジョンソンの恋愛詩……………安藤 重治……………一二三

『チェインジリング』の悲劇の世界……………三益 隆一……………一二五

『パラダイス・ロスト』考……………旭 覚……………一二六

——第二巻と第一巻の対比をめぐって——

ミルトンの楽園……………飯沼万里子……………一二五

——ネオプラトニズムの一面を追って——

R・クラッショウと愛の隠喩……………吉田 幸子……………一二四

——英国神秘思想とのかかわりにおいて——

「雄鶏と狐」論……………岡 照雄……………一二〇

「キャデューナスとヴァネッサ」論……………山口 勝正……………一二四

『クラリッサ』における対照について……………久代佐智子……………一二九

批評用語としての「マナーズ」考……………山本 利治……………一三三

「ジョンソンの時代」としての十八世紀中葉……………中原 章雄……………一三四

「ティンタン・アベイ」——新解釈の試み……………	宮川 清司……………	三四
コウルリッジの「この菩提樹の木蔭はわが獄舎」——鑑賞……………	床尾 辰男……………	三五
ジェイン・オースティンにおける知能の問題について……………	白田 昭……………	三七〇
太古の空と詩人の祈り……………	村松 眞一……………	三六一
——キーツのソネット一篇を読む——……………		
キーツの二つの『ハイペリオン』……………	藪下 卓郎……………	三九五
カトル船長のでたらめな懷中時計……………	植木 研介……………	四〇七
——『ドンビー父子商会』の時計と時間——……………		
『指環と書物』……………	桂 文子……………	四一九
——第一一卷「グウィドー」覚え書——……………		
『シャーリー』試論……………	井口 淳……………	四三二
『ダーバヴィル家のテス』の結末……………	前川 哲郎……………	四三七
ハーデイの「巨石にさす影」……………	山田 明子……………	四四九
ウェイリイをめぐる……………	中村 元一……………	四六三
——「追いつめられて」考——……………		
イエイツ・最終詩考……………	辻 昭三……………	四七五
イエイツの民謡詩の仮面……………	内藤 史朗……………	四九〇
——△語り▽と△詩▽——……………		
「その要点」から『モリス』へ……………	米沢 清寛……………	五三三
——E・M・フォースター小論——……………		

『ダロウェイ夫人』覚え書

『波』素描

深夜のヴィジョン

——ダロウェイ夫人の得たもの——

水の遠さ

——ヴァージニア・ウルフのモチーフをめぐって——

ヴァージニア・ウルフのスケッチにみる意識の表現

美しき死神達

——『虹』に於ける女達の役割——

エデンからの旅人ミューア

復活した頌歌

——T・S・エリオット論ノート——

〈連辞〉の復位

——T・S・エリオット私論——

「プルフロックの恋歌」

ウィルフリッド・オウエンの戦争詩

オーウェルのビルマ体験

——『ビルマ時代』をめぐって——

カトリック作家グレアム・グリーン

回想のディラン・トマス

多田 稔……五五

奥西 晃……五六

高橋 和久……五七

御輿 哲也……五三

芝崎 祐子……五四

平井 雅子……五六

土屋 繁子……五九

木村 守雄……六二

三宅 雅明……六五

宮内 弘……六五

加茂 映子……六六

古我 正和……六六

大川 正憲……六九

川野美智子……六七

マードックとロンドン	阿部 幸子	六五
漱石の宿をめぐって	野谷 士	七九
——英京倫敦の記——		
ワイルドと谷崎潤一郎	古川 弘之	七三
——大正八年とその前後——		
「金枝」の系譜	椎野 禎文	七五
「詩と信念」についての論争	久津木俊樹	七七
音のスタイル論	豊田 昌倫	七九
エマソンとディケンズ	小島 啓邦	七一
自我の緋文字 A	鈴江 璋子	七三
ホーソーンの「金髪」好み——その虚実	丹羽 隆昭	七六
一つの「黒猫」論をめぐって	福岡 和子	八五
空間と文化象徴	田中 礼	八七
——ホイットマンの場合——		
もう一人のペシミスト、アンガー	中村 紘一	八九
——メルヴィルの『クラレル』から——		
『ねじのひねり』批評について	古茂田淳三	八四
三代目としてのヘンリー・ジェイムズ	青木 次生	八三
コメディーとエレジーの奇妙な共存	押谷善一郎	八四
——ステイバーン・クレインの「花嫁イエロー・スカイに来る」について——		

ロバート・フロスト……………	武田 雅子……………	八七
——寡黙と饒舌——		
ジョン・ドス・パソスの『U・S・A』の「物語」部分の文体について……………	広瀬 英一……………	八九
フォークナーの「熊」第五章の意味するもの……………	高屋慶一郎……………	九三
「心という聖域」……………	小野 清之……………	九五
——『聖域』の草稿について——		
エアリアル の 飛翔……………	皆見 昭……………	九九
T・ピンチオン『V.』の構成とスタイル……………	中川ゆきこ……………	九〇
ピンチオン『V.』における「語り」……………	三宅 卓雄……………	九三
——その多様性の仕組——		
奴隸制とアメリカ文学研究……………	須田 稔……………	九六
あ と が き……………	岡 照雄……………	九七

狂気の詩魂

——スウィヴネ伝説とフラン・オブライエン——

佐野哲郎

『パイドロス』において、ソクラテスは言う。

しかしながら、実際には、われわれの身に起こる数々の善きものの中でも、その最も偉大なるものは、狂気を通じて生まれてくるのである。むしろその狂気とは、神から授かって与えられる狂気でなければならぬけれども。

まことに、デルポイの巫女も、ドドネの聖女たちも、その心の狂ったときにこそ、ギリシアの国々のためにも、ギリシア人のひとりひとりのためにも、実に数多くの立派なことをなしとげたのであった。だが、正気のときには、彼女たちは、ほんのわずかのことしか為さなかったし、あるいは、ぜんぜん何もしなかったと言つてよいのである。（藤沢令夫訳・岩波文庫、五二頁）

ソクラテスは恋人に宿る狂気も恐るべきではないことを教え、さらには、ミューズの神々が詩人に授ける狂気について述べるのである。シェイクスピアの

狂人と恋人と詩人とはすべて

空想からできている

『真夏の夜の夢』五幕一場七—八行

はまさにこれを受けたごとくであるし、ドライデンも『アプサロムとアキトフェル』に、「天才は狂気に近し」(一六三行)の一句を残している。

日本にも、昔から神懸りという一種の狂気があった。これは神前で舞う者の着ける仮面に似たものではなかっただろうか。人間はそのままで神に相對することは許されぬゆえに、仮面を着けた。狂気は精神の仮面であったと言えよう。常人の分別を持つ人間は神に接しえぬゆえに、一時的あるいは永続的な狂気によって神の世界を垣間見た。正気はケであり、狂気はハレであった。もちろん、狂人はケの世界である一般の世間から弾き出されて、人外とならなければならない。それは神と接するための代償であった。そして詩人も同じであった。芭蕉の△風狂▽の道は、この人外者の辿る宿命であった。そう言えば、芭蕉の先達であった杜甫にも、「自ら笑う狂夫の老いて更に狂なるを」(「狂夫」という句があるではないか。

さて、中世アイルランドにも一人の狂人がいた。名づけてスウィヴネ(英語式にはスウィーニー)。彼はある小国(当時のアイルランドは氏族社会で、数百の小国に分かれていた)の王であったが、非常に短気な性格だった。ある時、ローナンという聖者が領土内で勝手に教会の線引きをしていたのに腹を立て、聖者の祈祷書を湖水へたたき込んでしまった。そののち、マイ・ラスという所の戦いで聖ローナンが兵士たちを祝福しているのにまた腹を立て、槍を投げつけて僧を一人殺し、聖ローナンの持っていた鐘をこわしてしまった。聖者は怒って彼に呪いを掛けた。そのためにスウィヴネは気が狂い、それと同時に体が軽くなって、一跳びで何十米も跳べるようになり、木のとっぺんに住むようになる。やがて体に羽毛まで生えてきて、鳥と同じように人を恐

れる生活をするようになる。そしてあちこちの木に移り住みながら、スウィヴネは詩を作るのである。時には生活の苦しさを歌い、時には自然をたたえる歌を。

木の上の放浪が始まって七年たった頃、昔なじみのリンシャハンという男が捜しに来て、とある谷間の空家で疲れて眠り込んだ。スウィヴネは近くの木の上にいたが、そのいびきを聞いて、歌った。

あの男は壁際でいびきをかいているのに、

おれにはいびきはない。

マイ・ラスの戦いから七年、

おれは一度も眠れない。

おお神よ、あの戦いに出たのが

おれの運の尽き。

あの時からおれの名は

気違いスウィヴネ、木の住人だ。

.....

冷たい、冷たい、この体、

蔭の蔭から外へ出れば、

雨が降りかかり、

雷が鳴る。

元の妻で今は再婚しているエオランに会った時にも、歌が歌われる。

かわいいエオランは眠ってる。

いとしの亭主と床の中。

このおれさまは大違い、

ほっつき回って休む間もなし。

あっぱれエオランお前は言った、

嬉しがらせの出任せを。

あなたと別れてしまったら、

一日だって生きてはいられぬ。

今になったらよくわかる。

昔の連れ合いくそくらえ。

お前はぬくぬく羽蒲団、

おれはぶるぶる明日の朝まで。

スウィヴネは時に正氣に戻ることがあった。そのようなある時、一軒の家の中で寝ていると、一人の魔女がやって来て、問答となり、跳躍ぶりを見せてくれと言うので、その場で跳んでみせると、その位なら私にもできるというわけで、魔女も跳んでみせた。それでは、と一気に天窓から跳び出すと、魔女もついて来る。五百回位跳んでも、魔女は澄ました顔で隣りの木に留まっている。しかし、最後に魔女は跳びすぎて崖から落ち、粉々になってしまった。このエピソードについて、『白い女神』を書いたロバート・グレイヴズは、この魔女こそ幾多の民族が取り憑かれた白い女神の象徴であると言っている。

スウィヴネの最期は、モーリングという聖者の館においてであった。召使の女が、牛のふんの山に穴を掘って、ミルクを入れておくと、スウィヴネがやって来て飲むのである。ところがやがてこの女の亭主が二人の仲を疑って槍を投げつけ、それがスウィヴネの腹にささる。スウィヴネは死ぬが、いまわの際に彼は歌う。

昔むかしのこのおれは、

ぼそぼそとささやく人声よりも、

水辺で遊ぶ雉鳩の

鳴声の方が好きだった。

昔むかしのこのおれは、

近くの鐘の音よりも、

岩のつぐみや嵐の鹿の

鳴声の方が好きだった。

昔むかしのこのおれは、

近くの美人の声よりも、

夜明けの山の雷鳥の

鳴声の方が好きだった。

この物語は十二世紀の『スウィヴネの狂気』という稿本にまとめられている。これはアイルランドの多くの神話・伝説と同じように、散文の物語の中に詩が交じるといった体裁のものである。この稿本以外にも、スウィヴネの作と言われる詩が残っている。この分野での第一人者であるジェイムズ・カーニーの『アイルランド

の文学と歴史の研究』によれば、これは現在のスコットランドからイングランドにかけて存在した中世のケルト人（ただしアイルランド人と同じゲール人ではなく、ブリトン人である）の王国であったストラスクライドで生まれ、それがアイルランドやウェールズへ伝わったものである。これがアイルランドで土着化したことを示す一つの事実がある。『スウィヴネの狂気』より古い九—十世紀の稿本が、スウィヴネが狂気となったかのマイ・ラスの戦い（七世紀に実際にあった）について述べ、その戦いの勝利である所以を三つあげ、その中にスウィヴネの狂気を含めているのである。そして曰く、

この戦いの勝利の所以は、スウィヴネが狂気となったそのことにあるのではなく、そのために彼がアイルランドに歌と物語を残してくれたことにあるのである。（『スウィヴネの狂気』iv頁）

もちろんスウィヴネの詩が同一人の作であるわけではなく、いわゆるオシアン詩がフィアンナ団のオシアンの作とされたのと同様の事情が、ここにもあるだろう。

この物語はいろいろな意味で興味深いのだが、二つの点だけあげるとすれば、その一つは、ジェラード・マーフィーが『アイルランド初期抒情詩集』でスウィヴネの詩を『自然詩』の部に入れているように、これらの詩が中世アイルランドの誇る自然詩群に、楽しい例を付け加えていることである。思うにアイルランドの自然詩には、次のような特徴がある。一にしばしば宗教的感情と結びつくこと、二に自然の描写は論理的、説明的ではなく、利那的、印象主義的、列挙的であること、三にほとんど常に自己の個人的感情を投影すること、四にしばしば特定の地名が歌われること、五に自然への直接の呼びかけが多いこと、などである。数百年から千年以上を隔てた今日でも私たちの胸に響く詩が多く残されているのであって、スウィヴネの詩もその一例である。マーフィーの詩集から短い例を一つあげておこう。これは『スウィヴネの狂気』の稿本には含まれてい

い。

トウィム・インヴィルのおれの礼拝堂、

大きな邸より楽しく、

見事に並んだ星と

日と月を仰ぐ。

名人がこれを造った。

(この話を皆に聞かせるために。)

天の神様が

屋根を葺いてくれた。

雨も漏らぬし、

槍も降らぬ。

回りには垣もないし、

庭園のように明るいのだ。

これは八世紀頃の詩とされ、これを筆写した書記が「蔦の絡まる梢」と注記しているので、礼拝堂とは実はスウィヴネが住んでいた木のことと考えられるのである(ケネス・ジャクソンのように、これに反対する学者もいるが)。

もう一つの興味深い点は、言うまでもなく狂気である。ロマン主義の洗礼を受けた現代人にとっては、これはとくに詩魂を揺り動かすものではないだろうか。しかも狂気が跳躍と結びついている点に注目したい。魂に